コロナ危機 地方から

攻めの投資へ支援必要

ミシュラン12年連続星 京都・要庵西富家社長に聞く

「ミシュランガイド」で12年連続で星を保持する京都市の料理旅館、要庵西富家。客室7つと小粒ながら、パリに本拠を置くホテル・レストランの会員組織にも加盟する。新型コロナウイルス禍で8割を占めた訪日外国人客が消えたが、西田和雄社長は「今こそ攻めの設備投資」と訴える。

――京都の観光業界はコロナで一変しました。

「19年まで売り上げは6年連続で伸びていた。20年は2月が前年比で30%減、3月は70%減に落ち込んだ。4月以降は外国人の宿泊客がゼロで壊滅状態だ。京都市の地元宿泊の応援キャンペーンや国の『Go To トラベル』に参加してきた。ただ外国人客の落ち込みをカバーできない。Goは旅行会社経由でできればメリットも大きいが、直接予約を受けていると代理で手続きをするなど手間がかかる」

――厳しい状況にどう対応してきましたか。

「無利子無保証料の融資に国の持続化給付金、京都府市の制度なども利用できる支援制度は全て申し込んだ。緊急事態宣言に伴う休業要請にも協力し、給付金も受け取った。すべての手続きをひとりで、というのは正直負担が大きかった。なんとか運転資金を確保する守りの姿勢ではいけない。必要なのはより高品質の旅館にしようという攻めの経営。その意味で前向きな設備投資への支援がもっとあればと思う」

――積極的な設備投資を続けてきました。

「この5年間でテーブル席のダイニングルーム5部屋を新調し、今春には厨房の刷新やカウンター割烹（かっぽう）の新設に4500万円を投じた。現在も2つの客室をリニューアル中だ。外国人客は日本の文化に触れるため旅館に泊まる。その後に世界チェーンの高級ホテルに泊まって、旅館は古くさい、快適性にかけるとなってはダメ」

要庵西富家の西田社長は積極的な設備投資を進めてきた

旅行回復見すえ魅力向上

――京都観光が復活するために必要なことは。

「外国人の宿泊客が19年の水準まで回復するには3～4年はかかると思う。海外旅行の代わりに国内の旅先に選ばれることが大事だ。そのためには宿泊施設1軒1軒が魅力を高める必要がある。旅館の魅力は料理、もてなし、施設。これからはさらに京都の文化、日本の文化を発信し、それぞれの旅館の個性を磨くことが求められる。前向きな投資を決断し、実行できる経営力も問われる」

（聞き手は池光靖弘）